

県中教研 音楽部会だより

第 38 号

発行日 令和5年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 竹内 文恵
題 字 金山 泰仁 先生

「対話的な学び」の場の更なる充実を

指導主事 海見 英理

学校訪問研修で、「対話的な学び」の素敵な場面を参観させていただきました。生徒指揮者が表情豊かに体全体を使って指揮をし、級友は指揮者の思いを読み取り、感じ取ったことを自由に表現していました。指揮により個々の思いが一つになり、合唱がみるみるうちに変化していきました。

「対話的な学び」について、中央教育審議会答申（平成28年12月）には、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」と示されています。「対話的な学び」については、話し合い、付箋を用いた意見収集や分類等、様々な方法が考えられます。

「対話的な学び」について、音楽科では次の2点も大切な視点です。

1点目は、音楽作品や演奏、作詞者・作曲者、演奏者のメッセージ、作品解説等を対象にした、作品との対話です。例えば、「ベートーヴェンはなぜこの部分をこのような音にしたのだろうか？」と問うとき、生徒は作曲家と直接対話はできません。しかし、音楽を聴いたり楽譜を見たりすることを手がかりに、じっくりと作品と向き合うことで、「…という理由でこのような音にしたのだろう」と考えを広げたり深めたりすることができます。

2点目は、範唱（範奏）と模倣唱（模倣奏）による対話です。日常の授業では、教師の範唱を聴かせることで、生徒が模倣して歌う場面がよくあります。「出だしの言葉をはっきりと」と言葉で伝えなくても、教師が範唱を通して思いや願いを生徒に伝え、生徒は音楽的なメッセージを受けて表情や声の音色、リズム、強弱等を工夫します。

生徒一人一人の学習が充実するよう、「対話的な学び」の場や方法を工夫するなど、日々授業改善に努めていきたいと思います。

（東部教育事務所）

「つなぐ 深める ひびきあう」

部長 竹内 文恵

「研修を止めない」「令和の日本型教育を進める」。5月の第1回部長会で、畑井県中教研会長が強調されたのはこの2点です。3年前からのコロナ禍で多くの研修が滞った時期を経て、今年度はできる限り研修を止めず、全員が集まる機会を一回でも設けてほしい、と強い願いを込めて話されました。また、個別最適な授業を行うために専門性を高める努力をすること、ICTの活用を進めること、生徒自らが調整しながら学ぶような授業を仕組むこと等が、私たち教師に求められていると再認識しました。

この3年間、音楽の授業では感染防止の観点から特に工夫が必要だったのではないのでしょうか。私自身、合唱授業での生徒間の距離の取り方やマスクの着脱のタイミングに悩み、リコーダー授業の代替として急遽ボディパーカッションを導入するなどしてきました。そういった制限の多い状況下でも、音楽を学ぶ生徒たちの目がキラキラと輝いていることに心を打たれます。人と人をつなぐ音楽の力や音楽教育の必要性について考え続けたコロナ禍での経験は、令和の日本型教育、主体的・対話的な深い学びを実現していくうえでのヒントとなったように思います。

さて、次年度は「つなぐ 深める ひびきあう」をテーマに富山県で全日本音楽教育研究会の全国大会が開催されます。運営主体となる県音研は、4領域での授業検討や研修会の実施を加速させています。11月に山口県で開かれた今年度の全国大会では、山口の教員が一丸となって全国の教員と交流している姿に触れ、刺激を受けてきました。

県中教研では、県音研の活動との相乗効果を狙い、郡市をまたいだ研修をスタートさせました。新たな視点が加わり、有意義な時間となっています。県中教研、県音研ともに、会員同士がつながり、教育への考え方を深め、互いの音楽観や授業に影響を与え、ひびきあう。そのような機会を皆でつくっていきましょう。

（射・小杉中）

第66回 研究大会報告

幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。
— 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善 —

東 部 地 区

(富・堀川中)

大庭郁穂教諭が、3年生で「こきりこ」を教材曲とし、「こきりこ」の音色やリズム、旋律から知覚したことを生かしながら、曲にふさわしい器楽表現を創意工夫するという学習課題で授業を行った。器楽合奏としての表現について、イメージするテーマを設定し、グループ毎に練習し、中間発表を行い、互いに意見交換した。生徒の実態を踏まえて授業者自身が編曲した楽譜を使用し、生徒の自由な発想に基づく楽器選択や演奏例を視聴するなど、イメージに基づく自由な表現の工夫を促した。また、タブレット端末のビデオ会議機能やホワイトボード機能を用いたICT活用により、生徒の主体的な活動が進められていた。

部会協議①では「主体的・対話的で深い学び」を実現する手立てとしての楽器選択やテーマ設定、ICTを活用した指導の在り方等がテーマとなった。海見英理指導主事からは、小学校からの系統性のある取組や器楽合奏を指導する上での工夫点、表現の創意工夫をより深めるための指導の進め方について助言をいただいた。

部会協議②では、授業力向上アドバイザーの齊藤忠彦先生より、「器楽教育の歴史」「主体的・対話的で深い学び」「令和の時代の学校教育」等に関してお話いただいた。本時の授業の講評から全国大会を控えている次年度への課題を示す中で、



「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」について分かりやすく解説していただき、大変参考になった。

荒木 学 (富・速星中)

西 部 地 区

(小・蟹谷中)

柳原薫教諭が、「表したいイメージと関わらせながら、まとまりのある旋律をつくろう」という学習課題の下、授業を行った。

前時では和音の動きと旋律との関わりや音のつながり方、まとまりのある曲にするための方法等について学習した。そして、班で好きな季節の写真を選び、感じ取ったイメージに合わせて旋律を創作した。作曲にはデジタルコンテンツを利用し、和音やリズム、音の高さ等を任意に選択しながら創作活動を行った。本時では、「イメージに合う旋律になっているか」「まとまりのある作品になっているか」という視点で互いに作品を聴き合い、出された意見を基に自分の作品の見直しを行った。

協議会では、デジタルコンテンツを活用した創作について「操作が簡単で、つくった曲の演奏をしてくれるため、音楽に苦手意識のある生徒でも親しみをもって創作に取り組むことができる」「和音や音符、楽器音の選択肢が少なく、イメージと合う創作がしにくい生徒もいた」等の意見が挙がった。また、「生徒同士でどのように作品を評価し合えばよいか悩んでいるグループもあった。前時につくった旋律と比較できるとより効果的な利用になったのではないか」という提案もあった。

平紀子指導主事からは、「自分が選んだ季節の写真を机の上に置いておくことでイメージが湧きやすく、思いや意図をもって創作できるような配慮がなされていた。ICTを活用した創作は操作が



簡単にできるが、生徒自身がイメージをもって試行錯誤できるように適切に使用すべきである」という助言をいただいた。

中橋 洋哉 (南・福光中)

令和4年度全日本音楽教育研究会全国大会 山口大会に参加して

「構成・旋律が生み出す雰囲気 味わって聴こう 組曲『展覧会の絵』」

岡本 美穂 教諭 (山口市立白石中)

鑑賞の学習は、プロムナードの前後の曲の特徴を聴き取り、その曲の間にふさわしいプロムナードを選ぶことを通して、組曲におけるプロムナードの効果を考えるという内容であった。授業では、グループに分かれ、生徒たちがICT機器を用いて何度も繰り返して音楽を聴いたり、音楽を形づくっている要素を手がかりにして課題について話し合ったりして、音楽の特徴を捉えながら課題を解決していた。プロムナードの効果を考える場面では、曲の各部分の音楽の特徴を明確に捉えていたからこそ、音楽に深く迫ることができていた。今回の授業では、グループ活動を通して、生徒の学びの変容を観察できた。また、ICT機器を効果的に活用することによって、協働的な学びが活性化し、主体的・対話的で深い学びが実現されることを実感した。

米多 彩 (滑・滑川中)

レセプション

第1日目の日程を終え、湯田温泉「かめ福オンプレイス」を会場とし、本大会のレセプションが開催され、全国各地から参加者が一堂に会し、交流する機会となった。

大会会長、大会実行委員長の挨拶からは、多くの困難の中でも、大会を実現させたいという、この大会にかける思いや願いが伝わってきた。歓迎演奏では、山口県の企業がもつ「打ち出し板金」という手作業の技術で制作された、アルミ製のヴァイオリンとチェロによる2重奏が演奏されるなど、地域のよさを生かしたプログラムが催された。

そして終盤では、富山県からの参加者全員がステージに立ち、来年度の全国大会富山大会のアピールをした。富山県の自然や文化をはじめとする富山県の魅力や、富山大会に向けてこれまで私たちが取り組んできた研修のあゆみを紹介した。来年度の全国大会に向けて、身の引き締まる思いである。

松坂 成規 (小・津沢中)

ワークショップ (歌唱指導)

山崎 朋子 指導教諭 (調布市立第五中学校)

山口大会では、歌唱や指揮法、創作などの5つのワークショップとパネルディスカッションが行われた。

今回は、東京都調布市立第五中学校指導教諭の山崎朋子先生による歌唱指導に参加し、山崎先生が作詞・作曲された「空は今」「幸せ」「絆」の3曲を実際に歌いながら、これらの曲に込められた思いや、歌い方の工夫などについて教えていただいた。「スタート数秒が人の心をつかむ」や、「音楽はレガートがあってこそ」という山崎先生の言葉が印象的で、前奏の大切さや、生徒がもっと歌いたいと思えるような声かけや練習の進め方について学ぶことができた。そして、日々の指導の中で、できないことばかりに目を向けるのではなく、生徒と共に考え、学び合いながら音楽を楽しんでいくということの大切さを改めて感じた、大変有意義な時間となった。

村田 幸子 (高・五位中)

令和4年度富山県音楽教育研究会 研修会に参加して

県音研の研修会は、来年度の全日音研「富山大会」に向けて、8月と11月に領域別の講習会及び指導案検討を行った。8月の研修会は領域ごとに講師の先生方をお呼びしての研修会であった。私が参加した器楽領域では、国立音楽大学教授の津田正之先生をお迎えし、「新学習指導要領の趣旨を踏まえた器楽分野の学習指導の充実について」というタイトルのもと、新学習指導要領の器楽領域の評価についてや令和5年度「富山大会」で扱う「こきりこ」の指導の工夫について研修を行った。

その中で、「器楽」と「歌唱」の相違点として、「器楽はできないと面白くない。ある程度の『できる』を担保してあげないと工夫はできない」とのご指摘があった。また、「指導に生かす評価」「記録に残す評価」のために「学習評価の趣旨の明確化」や「継続的な見取り」の重視を語られた。

泉 綾乃 (魚・東部中)

フレッシュさんから

中学校の教員になって

立山町立雄山中学校 安田 絵美

念願の中学校の教員になって半年以上が経過した。小学校の音楽専科として勤務していた経験を生かしつつ、生徒の現状に合わせて楽しく分かりやすい授業を目指して教材研究に励んでいる。

しかし、実際は、学級事務や部活動の指導とのバランスがとれずに日々悪戦苦闘している。先輩教員からの温かい助言をもとに、先を見通して丁寧に仕事をしていきたい。また、「音楽の楽しさや素晴らしさを子供たちに伝えたい」という教員を志した時の気持ちを忘れずに、日々生徒に真正面から向き合っていきたい。

音楽を通じて

富山市立奥田中学校 廣田 晴奈

この一年、日々の学校生活や様々な学校行事に初めて教員という立場で携わってきた。

全てのことが初めての中、合唱コンクールでは歌唱指導の他にも生徒のやる気の差やクラスごとの雰囲気の違いなど、指導する上で自分自身の経験と実力不足に悩むことが多くあった。しかし、生徒たちが日々の練習の中で自分たちの成長を感じ喜ぶ姿や、当日堂々とステージで表現する様子を見て、改めて音楽のもつ力やよさを実感した。

今後さらに生徒たちが音楽のよさや美しさを感じられるような授業づくりを目指して、生徒と共に学ぶ姿勢を大切にしていきたい。

授業を通して感じたこと

富山市立上滝中学校 竹脇みちる

4月から、生徒と一緒に音楽の授業を通して多くのことを学んできた。生徒の中には音楽好きな生徒がいる一方、「なぜ音楽を学ぶ必要があるのか」という疑問をもち、音楽を学ぶ意味を見出せない生徒もいる。その反応から、私は、何をどのように生徒に伝えるべきか考える機会が何度もあった。

全員で同じ曲を演奏しても、曲の捉え方や表現方法は一人一人違う。生徒には「音楽に正解はなく、感じたことを自由に表現しよう」と伝えている。

これからも幅広いジャンルの音楽に触れ、多様な感情を経験したり、他の人の感じ方を知ったりすることで、様々な見方や考え方を生徒と一緒に学んでいきたい。

生徒たちのパワー

富山市立三成中学校 北田 実希

「生徒たちのパワーってすごい」。ありきたりな言葉だが、学習発表会を終えて、心からそう思った。

三成中学校の学習発表会では、例年2年生が和太鼓の演奏を行っている。本格的に練習を始めたのは2学期からだったが、本番では力強い演奏を披露していた。また、2年ぶりに実施された合唱コンクールでは、クラス単位での合唱は3年生でさえ初めてだったが、本番では全クラスが真剣に、かつ楽しみながら歌っていた。

生徒一人一人がもつパワーを引き出すのが教員の役割だと思う。音楽を通して、生徒たちが輝く瞬間を創れるように精進していきたい。

一年を振り返って

富山市立楡原中学校 藤井 瞳

4月からもう一年が経とうとしている。学級経営や授業に悩みながら、生徒と同じように少しずつ学んでいる毎日である。

本校は生徒の人数が非常に少なく、クラスごとの合唱コンクールではなく全校合唱を学習発表会で行った。練習日程やパート分け等、様々な問題があったが、合同授業を行ったり、パートリーダーを中心に改善点を話し合ったりすることで本番では全員で力を合わせ歌いきることができた。

今後も自己研鑽を積み重ね、生徒一人一人が音楽の楽しさ、面白さを味わえるように授業づくりを行っていきたい。

生徒の成長とともに

高岡市立南星中学校 竹林 史貴

年間を通じて音楽科としての大きな行事が、合唱コンクールである。コロナ禍ということもあり、マスクをしての歌唱が当たり前になった中で、音楽科としてどのような指導が最適か考えさせられた期間となった。マスクをしていることで歌唱に最適な口の開け方であったり、発声方法をどのように伝え、指導するにはどうすればよいかなど、試行錯誤した。

そのような状況でも生徒達は限られた時間と制限のある中で、仲間と一生懸命に協力し、本番では素晴らしい合唱を奏でてくれた。これからも教員として私も研鑽を積みながら生徒とともに成長をしていきたい。